

令和4年度事業報告

自 令和4年 4月 1日
至 令和5年 3月31日

公益財団法人ハイライフ研究所

令和4年度(2022年度)の事業計画【計画】

第41回理事会(令和4年3月14日開催)の第1号議案「令和4年度事業計画」でご承認いただきました事業計画は以下の通りです。

1. 基本方針

<方針1> 財団理念と事業目的に基づき、中期事業計画(-2022)に則った調査・研究事業を推進し、その集大成的年度とする

未来に向けて志向していくべき新しい生活の方向性を“ハイライフ”と定義し、調査・研究を実施し、その成果を啓発・普及していく研究財団として、

(財団理念) 「都市生活者のよりよい生活の実現への貢献」

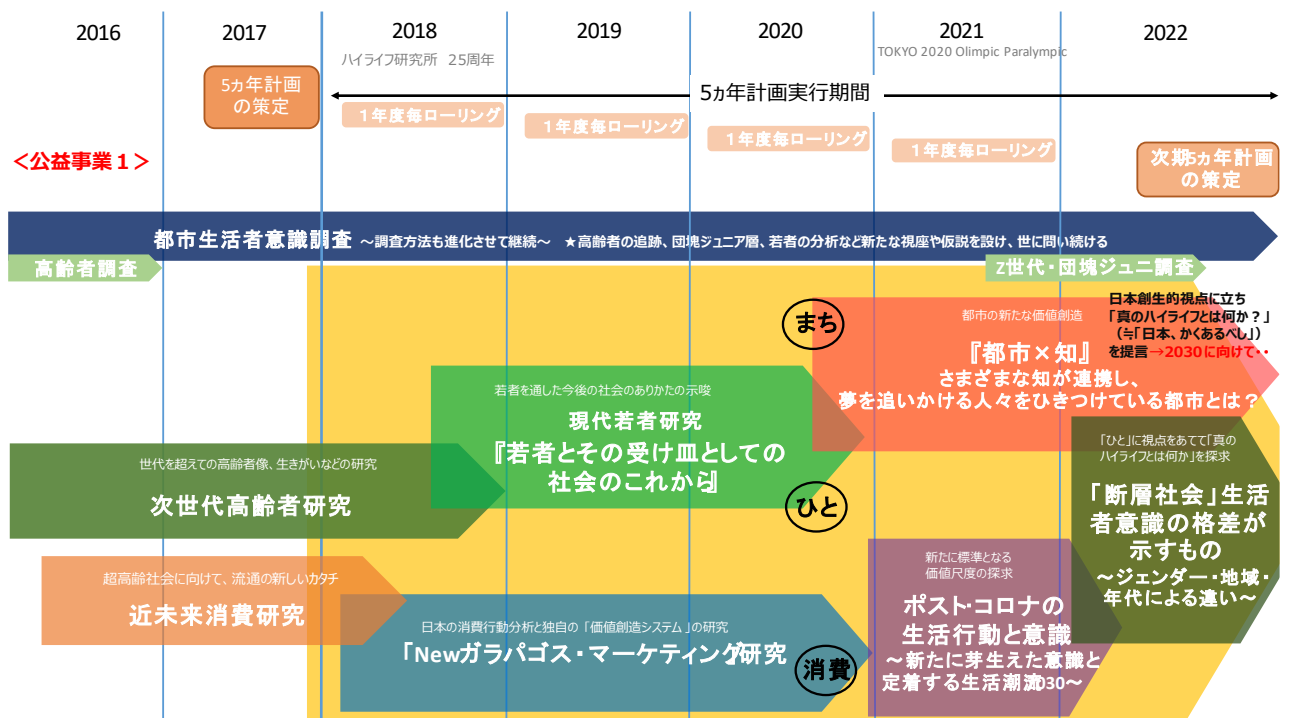
を財団理念に据え、引き続き、(公益事業1)「調査・研究」事業と(公益事業2)「啓発・活動事業」に区分して、それぞれの内容のさらなる充実化・高度化を目指すために、

(事業目的) 「持続可能な都市居住の実現に向けた知見の獲得と、社会との共有」

を事業目的として、『まち』『ひと』『消費』の3カテゴリでの調査・研究を行っております。

また、平成30年度(2018年度)に設立25周年を迎え、このタイミングで四半世紀を振り返り、時代や環境の変化を再認識し、設立30周年に向けてのターニングポイントと位置づけた中期事業計画(5ヶ年計画)を策定し、その礎のもとにこれまでの研究を進めております。(下図参照)

令和4年度(2022年度)は、この中計の最終年度として、その集大成的な調査・研究を遂行し、計画を完結させます。



**<方針2> 公益法人研究所の使命として、将来への変化の予兆を発信し続けることを
念頭におき、新中期事業計画(2023-2027)を策定する**

「都市生活者のよりよい生活の実現への貢献」を財団理念に据え、「持続可能な都市居住の実現に向けた知見の獲得と、社会との共有」を事業目標に調査・研究を行っている当財団の使命として、新型コロナウイルス感染拡大や、この度のロシアのウクライナ侵攻のような大きな社会変化をもたらす事象が人々の暮らしや考え方にどのような影響を与え、どのように変化していくのかを解明。さらには、この先将来に向かって、どのような生活価値観やライフスタイルが定着していくのかを予測することが公益法人の研究所としての責務であります。

つまり、この先の『社会はどのように移り変わっていくのか』を予見し提唱していくこと。それは、決して商業ベースではなく、正しく冷静に、社会や人々の暮らしの変化を見極め、世に対し啓発していくことだと考えております。

当財団 30 周年となる令和 5 年度からの中期事業計画(2023-2027)は、令和 4 年度中に策定いたしますが、上記のような公益法人研究所の使命・責務を全うしていくことが、その考え方の基本となることは言うまでもありません。

**<方針3> 公益事業 1 で実行してきた調査研究結果を、
公益事業 2 で重層的かつ発展的に活用することにより発信性を高める**

現行の中期事業計画(-2022)の実行以前は、当財団の公益事業 1(「調査・研究」事業)と公益事業 2(「啓発・活動」事業)は上手く連携がとれておりませんでした。この両者は現中計(-2022)の遂行に伴い、相互の連携・有効活用を深め、より発信力を高めてきた経緯があります。

例えば、令和 3 年度でいえば、毎年(公 1)として実施している「都市生活者意識調査」の結果のエッセンスを生活者向けレポートとした(公 2)「暮らしの調べが聴こえる」ホームページ企画、また、平成 30～令和 2 年度まで(公 1)で実施した「現代若者研究」を(公 2)「若年社会人のライフスタイル研究」ホームページ企画にてさらに深掘した例などがあります。

令和 4 年度以降も、調査・研究のデータストックの有効活用を基軸に(公 1)(公 2)双方の連携を図り、また(公 1)における研究間でのシナジー効果も意識しながら発信性を更に高め、公益法人研究所の使命・責務を全うして参ります。

2. 令和4年度(2022年度)の事業体系

〈公益事業1〉 調査・研究事業

■調査:都市生活者意識調査 2022 (継続)

■研究1:まちの研究

【都市×知】(PHASE 3) (継続)

さまざまな知が連鎖し、夢を追いかける人々をひきつけている都市を調査/研究する。

■研究2:ひとの研究

「断層社会」生活者意識の格差が示すもの ～ジェンダー・地域・年齢による違い～ (新規)

〈公益事業2〉 啓発・活動事業

■ホームページ企画 A:「購買履歴データを用いた食品スーパー購買動向」レポート (継続)

■ホームページ企画 B:「都市の鍼治療」データベース (継続)

■ホームページ企画 C:都市×知「海外都市レポート」※(公1)まちの研究と連動して (継続)

■ホームページ企画 D:「人生のてんき予報」 ※(公1)ひとの研究と連動して (新規)

■セミナーA:第38回ハイライフセミナーの開催

まちの研究(研究1:【都市×知】)に関する研究成果報告

■セミナーB:第39回ハイライフセミナーの開催

ひとの研究(研究2:「断層社会」生活者意識の格差が示すもの)報告

■報告書の作成&配布

調査・研究の報告書、セミナー録

令和4年度(2022年度)事業展開／公益事業1:調査・研究【結果】

(調査) 都市生活者意識調査 2022

令和4年度(2022年度)は、以下の要領で第13回目(年目)として実施しました。

■ **調査目的** 都市生活者のニーズと現状、そして将来動向を把握するための基礎研究白書的な役割に加えて、研究テーマに資する役割も果たせる。
時系列分析を行うための基本質問に加え、新型コロナウイルス感染拡大に伴う意識や行動の変化に関する質問もトピックスとして盛り込む。

■ **調査対象** 東京30km圏内に在住の満18歳～79歳一般男女

■ **標本抽出** (株)インテージのマイティモニターから、性別年齢、居住エリア分散、単身比率、集合住宅比率が公的データの比率と乖離が無いようにスクリーニング。

1,607人
[内訳]

※人口構成比率に準拠

	計	満18 ～19歳	20代	30代	40代	50代	60代	70代
全体	1607	49	233	275	325	305	212	208
男性	804	25	116	139	162	161	105	96
女性	803	24	117	136	163	144	107	112

■ **調査方法** インターネット調査(調査画面を3本作成し、1本目回答者に2本目配信、2本目回答者に3本目配信の形で回収)

■ **調査時期** 令和4年10月21日(金)～11月10日(木)

■ **研究協力** (調査実施担当) 株式会社インテージ
(調査研究担当) 自由学園最高学部(大学)特任教授 水嶋 敦 氏

■ **公 表** 「分析編」・「データ編」各380冊
→ 全国主要大学の図書館、全国公立図書館へ無償で配布。
ならびに、当財団ホームページにPDF掲出。

■ **研究幹事** 公益財団法人ハイレイフ研究所 上席研究員 杉本 浩二

(研究1) まちの研究

【都市×知】(PHASE3)

さまざまな知が連鎖し、夢を追いかける人々を ひきつけている都市を調査・研究する

■研究目的

市民活動、市民参加など、市民の知恵を活かした活動を、大学の知、企業の知、医療の知、金融の知など「様々な知」が支援・連携しながら、「夢を追いかける人々をひきつけている」都市を調査・研究する。知のネットワークモデルを探り、都市のエコシステムに迫る。

■令和4年度の研究内容

○海外都市視察

「自律的かつ持続的に豊かであり続ける都市」はどのようにして作られるのか。都市に化学反応を起こす触媒や仕組みを探り、都市のエコシステムに迫るため、海外都市の視察を行った。

<海外視察>

- ・実施時期: 令和4(2022)年11月6日～18日
- ・視察都市: ロンドンーイギリス
ボローニャ、アレクサンドリアーイタリア
ヘルシンキ、エスポーフィンランド
ベルリン、エアランゲンドイツ

<海外視察・報告セミナー>

●タイトル:海外視察から見えてきた都市の知恵

海外視察報告を4つのテーマ毎に4週に渡ってオンデマンド方式で配信。

- ① 「知の広場」の著者アントネッラさんに聞く、図書館(知の広場)の未来
単独インタビュー:アントネッラ・アンニョリ氏(図書館アドバイザー)
5/19(金) 16:00～配信開始

アントネッラ氏は1952年セルヴァ・ディ・カドーレ(イタリア)生まれ、図書館アドバイザー。パブリック・スペースの環境作りから公共サービス、司書教育に関するアドバイザーとして、ボローニャ(サラ・ボルサ)、フィレンツェ(オプラーテ)などさまざまな図書館と協業。図書館をまちを豊かにする「知の広場」と位置付け、図書館を基点としたまちづくりに尽力している。今後の図書館は「市民と共に創ることの必要性」を説き、現在の図書館にある様々な機能(例えばヘルシンキの中央図書館 Oodi のような工房、スタジオ、ブース等)の巨大な集合体ではなく、「地域に根ざしたサービスや機能の分散化」を提唱している。

- ② イタリア都市にみる都市や社会との共創を生む場のデザイン
プレゼンター:水本宏毅氏(株読売広告社 都市生活研究所 ERD)
5/26(金) 16:00～配信開始

多くの施設で、Co-Creation(共創)やイノベーションを誘発する場づくりが官学民それぞれで見られた。特にイタリア・ボローニャにおいては、アーバン・イノベーション財団によるタクティカル・アーバニズムの手法を活用した市民との共創による公共空間のデザイン、ボローニャ市への理解を深めるための「都市イノベーション・ラボ」、再開発地区「DumBO」地区には市民、企業、NPO などのソーシャルな場として、地域のコミュニティ活動を活発

化することで、新しい文化やビジネスが生まれる場としてデザインされている。アレクサンドリアの「地区の家」に併設する「ポルト・イデー」にも「LAB121」「FAB LAB」などが用意され、ゆるい 7 つのルールのもとで運営されている。場のデザインに共通するキーワードは「トラスト(お互いへの信頼)」「フラット(多様であり対等であること)」「ビジョン(社会的な目標を共有する)」であった。

③ 欧州の都市にみる都市と市民の関わりのデザイン

プレゼンター:紫牟田伸子氏(株)Future Research Institute 代表)

6/2(金) 16:00~配信開始

市民とまち(行政)をつなぐ、市民団体や NPO、財団の存在がまちの活性化や福祉の増進に不可欠である。アレクサンドリア(イタリア)の「地区の家」、ロンドンのシティファーム、エアランゲン(ドイツ)における「フェライン」、ボローニャ(イタリア)のアーバン・イノベーション財団、エスポー(フィンランド)のエンター・エスポーなど、団体の在りようは違えど、市民とまちをつなぐ接着剂的な役割を担っていた。市民にとってはまち(社会)に関与する入り口となり、行政にとっては市民とつながる窓口となる。アレクサンドリアの「地区の家」は長年にわたる活動もあり、市と連携してまちづくりに寄与していることがうかがわれると同時に、まちなかのさまざまな団体との連携も進んでいた。

④ 欧州の都市にみるコミュニティグリーン

プレゼンター:紫牟田伸子氏(株)Future Research Institute 代表)

6/2(金) 16:00~配信開始

ロンドンでは「国立公園都市」が宣言されており、武田重昭氏のヒアリングからは、ロンドンのグリーンインフラ整備は、公園や街路樹整備以外に、市民農園や個人宅の庭なども考慮にいれた上でグリーンをレイヤーとして考えている旨の発言があった。また、コーディネーターの山下めぐみさんからは「ロンドンでは Wilding(野生化)に回帰している」との発言もあった。今回の視察では、ロンドン、ベルリンにおけるシティファームを訪ねたが、長年 NPO が運営しているシティファーム(ロンドン、ベルリン)もあれば、Floating Berlin のようにテナポラリーに環境を考える場としてつくられているところや、建築事務所の一角を環境教育・癒しの場として地域に開放しているところもあった。また、アレクサンドリアの市民農園では、市が持つ広大な土地を、年齢や収入の制限、“販売物にしない”などの福祉的な観点で運営されていた。

■第 38 回ハイライフセミナー(オンデマンド配信)

- ・タイトル:海外視察から見えてきた都市の知恵
- ・開催日時:令和 5 年 5 月 19(金)16:00 より 4 週に亘って配信

■研究幹事

公益財団法人ハイライフ研究所 代表理事副理事長 榎本 元

(研究2) ひとの研究

「断層社会」生活者意識の格差が示すもの ～ジェンダー・地域・年代による違い～

※令和4年度においては、サブタイトルは当初、【～地方、女性が創る未来のかたち～】であったが、研究結果及び研究の進捗に合わせて、【～ジェンダー・地域・年代による違い～】に変更した。

■令和4年度の研究内容

○令和4年度においては、定性調査(インタビュー取材8名)および定量調査(N=2,576)を実施

➤ 定性調査(インタビュー取材)の対象と概要

- ✓ 20代2名、30代4名、40代1名、50代1名の合計8名(男性は2名)
- ✓ 学生時代(最終学歴)を首都圏で過ごした人は2名。就職・転勤で首都圏に関わる人は6名を数える。また、現在、首都圏居住者は2名である。
- ✓ 職業に関しては、転職経験がある人が6名である。
- ✓ 所謂、現役世代であり、年齢的にも若いため、自己の将来の夢を模索中、自己実現に突き進む最中という状況にある。

➤ 定量調査(インターネットによる意識調査)の対象と概要

	男性						女性					
年代	20代		30代		40代		20代		30代		40代	
エリア	東京	地方	東京	地方	東京	地方	東京	地方	東京	地方	東京	地方
N=	228	211	209	210	212	216	224	228	208	214	209	207

- ✓ エリアについては、東京と地方(北陸3県)で各々200名以上の回収を目標とした
- ✓ 地方の20代においてのみ、回収数を200名とする為、北陸3県(福井県、石川県、富山県)に新潟県、山形県、秋田県、青森県の4県を加えている
- ✓ 主な調査項目として、幸福度、就職(転職重視点)、生き方暮らし方の意識、自己効力感などがある。※質問数は46問である(属性に関するものも含む)
- ✓ 結果報告は、性別・年代別・地域別の視点から結果を報告する形式をとっている。※更なる細かい分析については令和5年度研究にて継続する

➤ 令和4年度の研究報告について

- ✓ 実施した定性調査、定量調査について、その結果概要を網羅的に報告
- ✓ 調査結果について、日本女子大の大沢先生、盧先生と座談会を実施し、今期の研究に関する総括的なまとめと今後の研究視点への課題について整理し、報告書に掲載
- ✓ 今期の報告書の主な内容
 - 定性調査(取材インタビュー)内容とまとめ
 - 定量調査の概要、調査結果、全体概要(主な注視点)のまとめ
 - 研究参加者(大沢先生、盧先生、藤原、杉本)による座談会の報告

■第 39 回ハイライフセミナー(Web 開催)

- ・タイトル: 「断層社会」生活者意識の格差が示すもの～ジェンダー・地域・年代による違い～
- ・主な内容: 本研究を振り返るスタイルで構成。研究メンバーによる座談会形式で実施。
定性・定量調査結果から研究メンバーが特に注目した点を紹介する形式を取る。
- ・開催日時: 令和 5 年 7 月下旬配信開始予定

■研究幹事

公益財団法人ハイライフ研究所 専務理事業務執行理事 藤原 豊

令和4年度(2022年度)事業展開／公益事業2:啓発・活動【結果】

1. ホームページ&メールマガジンによる情報配信

(ホームページ企画 A)

「購買履歴データを用いた食品スーパー購買動向」

■企画意図

令和元年度から食品全カテゴリーでの購買行動分析によって、高齢者の「食生活」と「生活行動」を推測し、そのエッセンスをWEBコラムコンテンツとして周知してきた。

特に、令和2年度からはコロナ禍における高齢者の購買行動の変化についての考察が加わった。

令和4年度は、高齢者に限らず“全年齢層”を分析対象とし、令和3年3月から令和4年2月にかけてのショッパーの10歳刻みの性年代別購買行動について詳細に分析。

継続して変化を捉えていく重要性はますます高まるものと思われる。

■配信コンテンツ

R.4/5/13	第1回 「2021年のショッパー購買行動の変化」
R.4/6/23	第2回 「コロナウイルス蔓延から2年経過後の、購買行動への影響」
R.4/7/27	第3回 「『農産』カテゴリー別購買状況の変化」
R.4/9/30	第4回 「SMにおけるシニア層の食品スーパーにおける購買行動の変遷」
R.4/10/28	第5回 「直近における嗜好の変化」
R.4/11/25	第6回 「男性ショッパーの購買行動」
R.5/1/27	第7回 「シニアの好む量」
R.5/2/24	第8回(最終回) 「年未年始における購買行動変化」

■分析データ

rsSM(real shopper SM)のID付購買履歴データ、400万ID／全国から、10代から90代までの全世代男女の購買データを抽出し分析しました。

■研究委託

株式会社アルブレイン

「都市の鍼治療」データベース

■企画主旨

国際建築家連合会会長、ブラジルの都市クリチバ市長、さらにパラナ州の知事を務めたジャイメ・レルネル氏は、都市が抱える問題を手っ取り早く解決する方法論として「都市の鍼治療(Urban Acupuncture)」を提唱しています。多くの課題に直面する都市はさながら病人のよう。「都市の鍼治療」とは、その都市の病を根治することは難しいが、効率的に鍼治療のように治すことが可能であるという考え方に基づく方法論。

本データベースは、「都市の鍼治療」という考に則り、ジャイメ・レルネル氏の「都市の鍼治療」で紹介された事例を含め、国内外の成功事例を紹介するもの。また費用対効果が大きかった事例に関しても併せて紹介し。手術ではなく鍼治療のように、都市が抱える問題を治す知恵のデータベース。当企画は平成 25 年夏に立ち上がり、令和 4 年度で 10 年度目。国内外のレポートと写真はアーカイブ化され、300 に迫るデータベースとなった。データベースというコンテンツは、データが増えれば増えるほどデータ内のリレーションが密になり、その価値は高まっていく。また、当財団のホームページのコンテンツの中でもアクセス数の多さもかなりの上位に位置している。

ひと・まち・消費という3つの研究カテゴリーにおいて、(公益事業1)調査・研究事業とは別の形で継続的に国内外のまちをリサーチしアーカイブとして紹介している。

■配信コンテンツ

- | | |
|----------|--|
| R.4/5/13 | 261 ラリマー広場(Larimer Square)の保全(アメリカ合衆国) |
| | 262 Wine House やまつづら(福岡県) |
| | 263 関宿の景観保全(三重県) |
| | 264 四条通りの歩道拡張(京都府) |
| | 265 さいき城山桜ホール(大分県) |
| R.4/7/15 | 266 石巻市震災遺構大川小学校(宮城県) |
| | 267 京都市の眺望空間保全(京都府) |
| | 268 ゲトライデ通りの看板(オーストリア共和国) |
| | 269 ハレ・グラウハ地区の「地主調停」事業(ドイツ連邦共和国) |
| | 270 自由が丘のサンセットエリアのまちづくり協定(東京都) |
| R.4/9/16 | 271 ヘルシンキ中央図書館(Oodi)(フィンランド共和国) |
| | 272 ベットヒャー・シュトラッセ(ドイツ連邦共和国) |
| | 273 長崎の斜面移送システム(長崎県) |
| | 274 オモケンパーク(熊本県) |
| | 275 セネート(元老院)広場(フィンランド共和国) |

- R.4/11/25 276 インナーハーバー橋(デンマーク王国)
 277 鶴田商店(長崎県)
 278 日本大通りの再整備(神奈川県)
 279 京都国際マンガミュージアム(京都府)
 280 アンティランマキの地区保全(フィンランド共和国)
- R.5/1/13 281 寺西家と寺西長屋の保全(大阪府)
 282 コモンカフェ(大阪府)
 283 京都芸術センター(京都府)
 284 オクタビア・ブルバードの道路再編(アメリカ合衆国)
 285 ビーコン・ヒルの歴史的町並み保全(アメリカ合衆国)
- R.5/3.10 286 ポティの壁画(ブラジル連邦共和国)
 287 屋台空間カドレ(Ca'dore)(ブラジル連邦共和国)
 288 名山町の「バカンス」(鹿児島県)
 289 ドイツの森(ブラジル連邦共和国)
 290 チングイ公園(Parque Tingui)(ブラジル連邦共和国)
-
- R.4/7/15 「横浜のまちづくり 50 年」
 鈴木伸治(横浜市立大学国際教養学部教授)インタビュー(動画)
- R.5/3/10 饗庭伸(東京都立大学都市環境学部教授)インタビュー(動画)
- 研究委託 龍谷大学 政策学部教授 服部圭郎 氏

「海外都市レポート」

■企画主旨

(公1)研究「都市×知」の連動企画として、令和3年度期中から始めている。脱成長やポスト資本主義が議論される時代の過渡期において、豊かなまちであり続けるためには様々な知恵が必要となる。市民活動や市民参加を促し活性化させる知恵、それを大学、NPO、企業、金融などの専門的な知恵が支援し、みんなで共にまちを創っていくこと。そんな知恵のヒントを探るため、様々な「知の試み」が行われている、より先進的な海外都市の事例を定期的に紹介する。

■配信コンテンツ

- R.4/4/8 フランスの新しい都市像:ナント市の事例
～15分都市・人々は都市に何を求めているのか?～
(執筆:ヴァンソン藤井氏(パリ在住))
- R.4/5/20 アアルト大学をとりまくイノベーションエコシステム
(執筆:森一貴氏(フィンランド、エスポー在住))
- R.4/9/2 音楽と建築による都市再生
～ハンブルクのハーフェンシティ～
(執筆:山下めぐみ氏(ロンドン在住))
- R.4/9/30 スマートシティ・ディジョン
～人口26万人の広域自治体連合で統括的な都市マネジメント～
(執筆:ヴァンソン藤井氏(パリ在住))
- R.4/10/28 芸術が切り崩す社会の見えない壁
～刑務所をコミュニティに開き、親子をつなぎ、貧窮地区の子供たちの精神を
発火させる芸術の力～
(執筆:多木陽介氏(ローマ在住))
- R.5/12/9 共創する都市、エスポー
(執筆:森一貴氏(フィンランド、エスポー在住))
- R.5/1/20 日本から見えにくいドイツの都市の常識とは何か?
～ドイツの都市発展には「俯瞰的な把握」「軸と全体最適」「価値と更新」という3
つの原理がある～
(執筆:高松平藏氏(ドイツ・エアランゲン市在住))

■企画協力

株式会社 Future Research Institute 紫牟田伸子 氏

「人生のてんき予報」

- 企画主旨 (公1)研究「断層社会」との連動でのWeb企画。
「人生のてんき予報」～団塊ジュニア世代以降の若者の生き方探し～

団塊ジュニア世代以降、20代までに焦点をあて、生きていく上での「てんき(転機)」を中心にどのような目標を設定し、何を模索して生きているのかについて、インタビュー取材を行ってきた。そこからは社会全体が右肩上がりであった時代とは異なる、たくましさや価値観の変化を感じることができる一方で、家庭環境も含む社会における未来展望を持ちにくいということも浮き彫りとなってきた。

■配信コンテンツ

- R.4/11/30 第1回 「親元を離れて…21歳の確信」
第2回 「幸せの時間づくり…30歳の起業家」
- R.4/12/23 第3回 「自分に正直に生きる…29歳の波乱万丈」
第4回 「安定より楽しさを求めて…33歳の選択」
- R.5/1/27 第5回 「普通じゃない方が面白い…35歳の自由」
第6回 「高校時代の志を貫き、真っすぐに生きる…38歳の自己実現」
- R.5/2/17 第7回 「農業という可能性と誇り…45歳の道程」
第8回 「自分の好きなことを追い求める…52歳の成長」
- R.5/3/17 最終回 「まとめにかえて」

■執筆(取材インタビュー) 杉本浩二 (公益財団法人ハイレイフ研究所 上席研究員)

■編集協力 前田はるみ 氏

2. セミナー開催

(セミナー A)

第 38 回ハイライフセミナー 「都市×知」 ～海外視察から見えてきた都市の知恵～

■開催趣旨

自律的かつ持続的に豊かであり続ける都市はどのようにして創られるのか。欧州の都市(ロンドン、ボローニャ、アレクサンドリア、エアランゲン、ベルリン、ヘルシンキ、エスポー)において、市民が主体的にまちづくりや地域活動に参画している仕組みや事例をもとに行政、大学、企業、市民団体等が連携し、それらの市民活動をどのように支援し、共に活動しているのか。都市におけるネットワークモデルやエコシステムを探求した

■実施内容

- ・開催方式: オンライン配信(1回あたり約 30 分)
- ・開催日時: 令和 5 年 5 月 19(金)16:00 より 4 週に亘って配信

・コンテンツ

R.5/5/19(金)16:00～ 第 1 回配信

「知の広場」の著者アントネッラさんに聞く

図書館(知の広場)の未来

単独インタビュー ▶ アントネッラ・アンニョリ氏 (イタリア・図書館アドバイザー)

R.5/5/26(金)16:00～ 第 2 回配信

イタリア都市にみる

都市や社会との共創を生む場のデザイン

プレゼンター ▶ 水本宏毅 氏 (株読売広告社都市生活研究所)

R.5/6/2(金)16:00～ 第 3 回配信

欧州の都市にみる

都市と市民の関わりのデザイン

プレゼンター ▶ 紫牟田伸子 氏 (株Future Research Institute)

R.5/6/9(金)16:00～ 第 4 回配信

欧州の都市にみるコミュニティグリーン

プレゼンター ▶ 紫牟田伸子 氏 (株Future Research Institute)

(セミナー B)

第 39 回ハイライフセミナー
「断層社会」
～ジェンダー・地域・年代による違い～

■開催趣旨

本研究を振り返るスタイルで構成。

研究メンバーによる座談会形式で実施。

定性・定量調査結果から研究メンバーが特に注目した点を紹介する。

先に配信・発送されている研究報告書の解説も兼ねながら、研究内容を興味深く解き明かしていく。

■実施予定

・開催方式: オンライン配信(約 30 分)

・開催日時: 令和 5 年 7 月下旬配信開始予定

・座談会出席者

・大沢真知子 氏 (日本女子大学名誉教授)

・盧 回男 氏 (日本女子大学 人間社会学部 学術研究員)

・杉本浩二 (公益財団法人ハイライフ研究所 上席研究員)

・藤原 豊 (公益財団法人ハイライフ研究所 業務執行理事専務理事)

3. 報告書の配布

調査報告書、研究報告書、セミナー録を完成させ次第、メールマガジン会員へ対する配信、ホームページへの掲出、及び、全国主要大学の図書館、全国公立図書館(合計 380 部)へ無償にて発送。

<令和4年度配信および発送実績>

R.4/6/15 「都市生活者意識調査 2021」報告書 <データ編>

「都市生活者意識調査 2021」報告書 <分析編>

<令和5年度の配信および発送予定>

R.5/6 予定 「断層社会」研究報告書

「都市生活者意識調査 2022」報告書 <分析編>

「都市生活者意識調査 2022」報告書 <データ編>

受託研究

令和4年度(2022年度)の受託研究はありませんでした。

—以 上